2026年度 第6回（11月）北辰テスト対策 予想問題　解答・解説

国語

1　問1（4点）

イ

①をふくむ段落の初めに「正直に言えば、ぼくは乗り気ではなかった」とある。そのあとに、「机に向かう時間は一分でも惜しい」（受験勉強の時間が惜しい）ことと、①の「機械で作った紙がいくらでも安く買えるのに」（和紙を手で作る意味がわからない）ことの二つが理由として書かれている。

・ア 工房がつぶれるという責任感は本文にない
・イ 時間が惜しいことと、和紙の値打ちを感じられないことの両方をおさえている→正答
・ウ「乗り気ではなかった」と合わない
・エ 母に腹を立てる描写はない

採点ポイント: 「乗り気ではなかった」という心情と、その理由が二つ書かれていることをとらえられているか。

1　問2（4点）

手が覚える

祖父が自分の若いころの話をする段落に、「手が覚えるまでは、頭で考えたってだめなんだ。水の重さも、繊維の動きも、毎日さわっているうちに、手のほうが先にわかるようになる」とある。まとめの文の「までは」「頭で考えても」と本文を照らし合わせる。

・「手が覚える」（五字）が正答

採点ポイント: 空欄のあとの「までは」に続く形で抜き出せているか。「手のほうが先にわかる」（十字）は字数が合わない。

1　問3（4点）

エ

②の直前で、祖父の手は「何十年も、冬の冷たい水に入れ続けてきた手」と描かれている。その手に導かれると、繊維は「さっきとはまるで違う動きで」広がった。祖父が言った「手が覚える」「手のほうが先にわかる」感覚を、湊が初めて自分の手で感じ取った場面である。

・ア ②のあとで湊は「自分の手ですいてみたい」と思うようになっており、向いていないと思い知らされたのではない
・イ 腰の痛みをかくそうとする描写はない
・ウ 祖父が手を重ねて導いているので、「一人で」は誤り
・エ が正答

採点ポイント: 「さっきとはまるで違う」という対比から、祖父の手の経験の重みと、湊の体験の変化を読み取れているか。

1　問4（6点）

(例) すいた人の手の具合が残る紙で、卒業証書として毎年だれかに受け取られる（34字）

正答例:

・(例1) すいた人の手の具合が残る紙で、卒業証書として毎年だれかに受け取られる（34字）

・(例2) 祖父の手ですかれ、卒業証書として人の一生に一度の日を支えてきた（31字）

根拠: 祖父は「手ですいた紙には、すいた者の手の具合が、ちゃんと残る。そういう紙を、毎年だれかが、一生に一度の日に受け取る」と言っている。また湊は、三年近く前に自分が受け取った卒業証書も「祖父のこの手がすいたもの」だったと気づいている。はじめは「機械で作った紙がいくらでも安く買える」と思っていた湊が、和紙の値打ちに気づいた場面である。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「手」が使えている	1点	指定語必須
②「卒業証書」が使えている	1点	指定語必須
③ 卒業証書として人々の大切な日に受け取られている、という内容	2点	「自分も受け取った」等も可
④ すいた人の手の具合（思い）が残る、という内容	1点	「祖父の手ですかれた」等も可
⑤ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

1　問5（5点）

ウ

湊は、自分が受け取った卒業証書も祖父がすいた紙だったと知り、祖父の「そういう紙を、毎年だれかが、一生に一度の日に受け取る。だから、やめられんのだ」という言葉を聞いている。④はそのあとの場面で、「一枚でいいから」と控えめながら、自分もその紙づくりにかかわりたいと思い始めている。

・ア 直前に「家に着いたら、模試の復習をしよう」とあり、受験をやめるのではない

・イ「祖父よりも上手に」と自信を持つ描写はない

・ウ が正答

・エ 手伝いを悔やむ気持ちは、「土曜日にはまた工房へ行こう」と合わない

採点ポイント: 「一枚でいいから」という控えめな表現と、「受験が終わったら」という順序から、受験にも向き合いつつ紙すきに心を動かされている心情をとらえられているか。

1　問6（5点）

ア・ウ

・ア: 冒頭の「前後に、左右に。」は、短く区切ることで、枠をゆらす祖父の手の動きのリズムを印象づけている→適切

・イ: 本文は「ぼく」が語り手であり（「ぼくは、はっとした」など）、祖父の思いは、祖父の言葉や「少し照れたように笑った」などの様子を通して描かれている→不適切

・ウ: 「三年近く前の春、体育館で受け取った卒業証書」を思い出し、「あの紙も、祖父のこの手がすいたものだったのだ」と気づく場面がある→適切

・エ: 時期は十一月で、「冬の冷たい水」「冷えた指先」など、寒さが描かれている→不適切

・オ: 祖父の「来たか。」や「ぼく」の「やっぱり、ぼくには無理だよ。」など、会話文が用いられている→不適切

採点ポイント: ア・ウの二つを両方選んで正答（5点）。一つだけ、または三つ以上は0点。

2　問1(1)（2点）

よくよう

抑揚＝話したり読んだりするときの、声の調子の上げ下げ。
採点ポイント:「よくよう」以外の読みは不正解。「揚」は「あげる」の意味で、音読みは「ヨウ」。「よくしょう」などは誤り。

2　問1(2)（2点）

つちか（う）

培う＝時間をかけて、少しずつ育てたり養ったりする。もとは、根元に土をかけて草木を育てるという意味。
採点ポイント: 送りがな「う」まで含めて「つちかう」。音読みの「ばい」は不正解。

2　問1(3)（2点）

簡潔

簡潔＝むだがなく、要点がよくまとまっていること。
採点ポイント:「簡」は竹かんむり。「完結」（すっかり終わること）と書きまちがえない。

2　問1(4)（2点）

補（う）

補う＝足りないところを付け加えて、満たす。
採点ポイント:「補」は衣へん（ネ）。示へん（ネ）と区別し、右側は「甫」。「捕」「舗」と書きまちがえない。

2　問2(1)（2点）

イ

「結果をキロクする」＝記録（記）。ア天気（気）／イ日記（記）✓／ウ規則（規）／エ季節（季）。すべて「キ」と読むが、「記録」と同じ漢字を含むのはイのみ。
採点ポイント:「書きしるす」という意味から「記」を選べるか。

2　問2(2)（2点）

エ

「企画をテイアンする」＝提案（提）。ア丁寧（丁）／イ家庭（庭）／ウ停車（停）／エ提出（提）✓。すべて「テイ」と読むが、「提案」と同じ漢字を含むのはエのみ。
採点ポイント:「手で差し出す・持ち出す」という意味の「提」（てへん）を、「丁」「庭」「停」と区別できるか。

2　問3（3点）

ウ

用言は、活用する自立語で、それだけで述語になれる語（動詞・形容詞・形容動詞）。
・A「静かな」:「静かだ」と言い切れる→形容動詞（連体形）。用言
・B「小さな」:「小さだ」とは言えず、活用しない。体言（部屋）だけを修飾する→連体詞。用言ではない
・C「話す」: 動作を表し、ウ段で言い切る→動詞（連体形）。用言
・D「とても」: 活用せず、主に用言を修飾する→副詞。用言ではない
・E「やさしく」:「やさしい」と「い」で言い切る→形容詞（連用形）。用言
・F「温かだ」:「だ」で言い切る→形容動詞（終止形）。用言
よって用言はA・C・E・Fの四つ、そのうち形容動詞はA・Fの二つで、ウが正答。
・ア「小さな」を形容動詞としている（「小さい」は形容詞、「小さな」は連体詞）
・イ 連体形の「静かな」が形容動詞であることを落としている
・エ「やさしく」は「やさしい」と言い切る形容詞であり、形容動詞ではない
採点ポイント: 言い切りの形（終止形）に直して、「い」なら形容詞、「だ」なら形容動詞と見分けられているか。「あたたかい」は形容詞、「あたたかだ」は形容動詞と、言い切りの形で品詞が変わることにも注意。

2　問4（3点）

エ

文節は、意味がわかる範囲で、文をできるだけ短く区切ったまとまり（「ネ」や「サ」を入れて区切れるところ）。
・弟が／毎朝／庭の／花に／水を／やって／いる。→七文節
「やっている」の「いる」は、「やって」に意味をそえる補助の動詞で、それだけで一つの文節になる（「やってネ／いるネ」と区切れる）。
単語は、文節をさらに、意味をもつ最小の単位に分けたもの。
・弟／が／毎朝／庭／の／花／に／水／を／やっ／て／いる→十二単語
「やって」は、動詞「やる」の連用形「やっ」と助詞「て」の二単語。
よってエが正答。
・ア・イ「やっている」を一文節と数えている
・ア・ウ「やって」を一単語と数えている
採点ポイント: 補助の動詞（いる・ある・みる・しまう など）は一文節になること、「〜て」の「て」は助詞として一単語に数えることをおさえているか。

2　問5（3点）

イ

自動詞は、「〜を」という目的語をとらず、主語そのものの動きや変化を表す動詞。他動詞は、「〜を」という目的語をとり、ほかのものにはたらきかける動作を表す動詞。
・「看板が倒れる」: 看板そのものの動き→自動詞（対になる他動詞は「看板を倒す」）
・ア「犬を預ける」:「〜を」をとる→他動詞（自動詞は「預かる」）
・イ「電車が止まる」: 電車そのものの動き→自動詞 ✓（他動詞は「電車を止める」）
・ウ「教室を片づける」:「〜を」をとる→他動詞（自動詞は「片づく」）
・エ「目標を決める」:「〜を」をとる→他動詞（自動詞は「決まる」）
採点ポイント:「〜が」と「〜を」のどちらと結びつくか、対になる動詞（倒れる—倒す、止まる—止める）を思い浮かべて判断できているか。

2　問6（3点）

エ

句切れは、短歌の途中で意味の上で文が切れるところ。言い切りの形（終止形・命令形)、「かな」「けり」「ぞ」などで強める所、体言止めの所で切れることが多い。五・七・五・七・七に分けて、どの句のあとで切れるかを確かめる。

・ア「ふるさとの／訛なつかし／停車場の／人ごみの中に／そを聴きにゆく」：二句の「なつかし」（なつかしい）で言い切っている→二句切れ

・イ「清水へ／祇園をよぎる／桜月夜／こよひ逢ふ人／みなうつくしき」：三句の「桜月夜」で体言止めになっている→三句切れ

・ウ「東海の／小島の磯の／白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる」：最後まで一続きの文になっている→句切れなし

・エ「幾山河／越えさり行かば／寂しさの／終てなむ国ぞ／今日も旅ゆく」：四句の「国ぞ」で強めて意味が切れている→四句切れ ✓

採点ポイント: 句ごとに区切り、途中に文の終わり（言い切り・体言止め・強めの「ぞ」）があるかを探せているか。

2　問7(1)（2点）

イ

・①「ちかずく」:「近い」＋「付く」が結びついた語なので、「つ」がにごって「ちかづく」と書く→仮名遣いの誤り

・②「以外」:「それ以外」のように、あるものを除いたほかという意味。ここは「思っていたことと違って」という意味なので「意外」が正しい→漢字の誤り

・③「おおぜい」:「大勢」は「おおぜい」と書くのが正しい（「おうぜい」は誤り）

・④「関心」:「興味をもって心を向けること」なので「関心」が正しい（「感心」は、りっぱだと心を動かされること）

よって、①を「ちかづく」に、②を「意外」に直すイが正答。

採点ポイント: 「近づく」「手づくり」のように、二つの語が結びついてにごる「つ」は「づ」と書くこと、「大きい」「多い」と同じく「おお」と書く語（おおぜい・おおきい）があること、同音の熟語（意外―以外、関心―感心）を意味で区別できているか。

2　問7(2)（2点）

ア

石井さんは、まず「最後の『参加して、とても大切だと思った』だけでは、……伝わりにくい」と問題点を指摘し、「心に残った言葉はありませんでしたか」と質問して、山本さんから消防団の方の言葉を引き出している。そのうえで「その言葉と、そこから考えたことを最後に書くと……」と、具体的な直し方を提案している。

・ア が正答

・イ 意見をまとめて決めているのは司会の田中さんである

・ウ 漢字や仮名遣いの誤りにふれたのは田中さんで、石井さんは指摘していない

・エ 石井さんは題材に反対していない

採点ポイント: 石井さんの発言の流れ（指摘→質問→提案）をとらえられているか。

3　問1（4点）

エ

①の直前に「写真は、レンズの前にあるものを、すべて同じように写しとる。葉の上の小さな傷も、たまたま重なった別の草も、背景の土も、区別なく画面に入りこむ」とあり、直後に「どこを見ればその植物の特徴がわかるのかを、写真は教えてくれないからである」とある。

・ア「正確に写すことができない」は、「写真は正確でありながら」と合わない
・イ 本文には「一瞬で正確な姿を残せる」とあり、時間がかかるのではない
・ウ 印刷の大きさの話は本文にない
・エ が正答

採点ポイント: 「正確でありながら、かえって迷わせる」という逆説の理由を、前後の文からとらえられているか。

3　問2（4点）

対象をじっくりと見つめる時間

②の直後に「選ぶためには、何よりもまず、対象をじっくりと見つめる時間が必要になる。描く人は、手を動かす前に、見ることに多くの時間を使っているのである」とある。

・「対象をじっくりと見つめる時間」（十四字）が正答

採点ポイント: 空欄のあとの「が必要である」に続く形で、字数どおりに抜き出せているか。「見ることに多くの時間」（十字）は字数が合わない。

3　問3（6点）

(例) 見る人が自分の経験や記憶をもとに想像して満たし、作品の最後の仕上げに加わる（37字）

正答例:

・(例1) 見る人が自分の経験や記憶をもとに想像して満たし、作品の最後の仕上げに加わる（37字）
・(例2) 見る人がそこに何があるかを想像することで、作品の仕上げに自分も加わることになる（39字）

根拠: ③の直前「描かれていないからこそ、見る人は、自分の経験や記憶を手がかりに、そこを満たそうとする」と、次の段落「見る人は自分で考え、想像し、作品の最後の仕上げに加わることになる」をあわせてまとめる。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「想像」が使えている	1点	指定語必須
②「仕上げ」が使えている	1点	指定語必須
③ 見る人が自分の経験や記憶をもとに余白を満たす（想像する）、という内容	2点	「見る人によって霧や空に見える」等も可
④ 見る人が作品づくりに加わる、という内容	1点	「作品を完成させる側に回る」等も可
⑤ 30〜40字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

3　問4（5点）

イ

④の直後に「何を描かないかを決めることは、何を大切にするかを決めることでもあるからだ」と理由が述べられている。図鑑の絵の例でも、描く人は「たまたまついた傷や、ほかの草」を省き、その植物の特徴だけを残していた。

・ア 筆者は、すべてを描きこんだ作品では「受け取るだけで終わってしまう」と述べており、逆
・イ が正答
・ウ 手間や時間を省く話ではない（筆者は、選ぶためには見つめる時間が必要だと述べている）
・エ 写真が「いつでも劣っている」とは述べていない

採点ポイント:「〜からだ」で示された理由と、図鑑の絵の具体例とを結びつけられているか。

3　問5（4点）

ア

この段落は「図鑑の絵に限らない」と始まり、前の段落までの図鑑の絵の話（描くことは何を残し何を省くかを選ぶこと）を、水墨画の余白の例へと広げている。そのうえで、余白は見る人が「自分の経験や記憶を手がかりに」満たす場所であり、「作品と見る人とをつなぐ」という、見る人の側から見た新しい観点を加えている。

・ア が正答
・イ 省くことを否定してはいない（「省くことの力」を認めている）
・ウ 歴史や数字は示されていない
・エ この段落は本文の途中にあり、結論は最後の二つの段落で述べられている

採点ポイント:「〜に限らない」という言い方から、話題を広げる段落だと見抜けているか。

3　問6（5点）

ウ

本文全体の主旨:

・写真はすべてを区別なく写すので、かえって見る人を迷わせることがある
・図鑑の絵は、描く人が選んだ特徴だけでできており、描くことは何を残し何を省くかを選ぶこと
・水墨画の余白は、見る人が経験や記憶をもとに満たす場所で、作品と見る人とをつなぐ
・何を描かないかを決めることは、何を大切にするかを決めること
・ウ が正答
・ア 筆者は、絵を使う理由を説明しており、絵が不要になるとは述べていない
・イ 節約のためという内容は本文にない
・エ 筆者は、見る人が「作品の最後の仕上げに加わる」と述べており、逆

採点ポイント:「選ぶ（省く）こと」と「余白が見る人とつなぐこと」の二つの話題を結びつけて、筆者の結論をとらえられているか。

4　問1（4点）

たわぶれて

語頭以外のハ行「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直す。

・「たはぶれて」の「は」は語頭ではないので「わ」に直す
・よって「たわぶれて」

採点ポイント:「たはぶれて」のままは不正解。意味（からかって）から現代語の「たわむれて」に言いかえるのではなく、仮名遣いだけを直す。

4　問2（4点）

エ

本文は「定頼中納言たはぶれて、小式部内侍、局にありけるに、『……』と言ひて」となっている。間にある「小式部内侍、局にありけるに」（小式部内侍が局にいたときに）は、場面の説明をはさんだもので、「と言ひて」の主語は、その前の「定頼中納言」である。

言葉の内容も、「（母の和泉式部に歌を頼むため）丹後へつかわした使いはもどりましたか。気がかりでしょう」と、小式部内侍をからかうものであり、「たはぶれて」（からかって）と合う。

・ア・イ 和泉式部と保昌は丹後にいて、京の場面には登場しない

・ウ 小式部内侍は、この言葉をかけられた側である

・エ が正答

採点ポイント: 会話の直前にある人物（小式部内侍）にまどわされず、「たはぶれて……と言ひて」のつながりと会話の内容から、話し手を判断できているか。

4　問3（4点）

イ

・ア「詠みける」: 歌合で歌を詠む人に選ばれて詠んだのは小式部内侍

・イ「過ぎられける」: からかいの言葉をかけて局の前を通り過ぎたのは定頼中納言 ✓

・ウ「ひかへて」: 御簾から半分ほど身を乗り出して、直衣（貴族の男性のふだん着）の袖を引きとめたのは小式部内侍

・エ「詠みかけけり」:「大江山……」の歌を定頼中納言に詠みかけたのは小式部内侍

よって、主語が他と異なるのはイ。

採点ポイント:「過ぎられける」の「られ」は、身分の高い定頼中納言の動作であることを表している（あとの「逃げられけり」も同じ）。「直衣」が男性の服であることからも、袖を引きとめられたのが定頼中納言、引きとめたのが小式部内侍だとわかる。

4　問4（4点）

(例) 母からの手紙はまだ見ていない（14字）

正答例:

・(例1) 母からの手紙はまだ見ていない（14字）

・(例2) まだ母から手紙ももらっていない（15字）

根拠: 和歌の「ふみもみず」の「ふみ」は、「踏み」（天の橋立にはまだ足をふみ入れたこともない）と、「文」（手紙）の二つの意味をかけている。定頼中納言は「母に歌を頼む使いはもどったか」とからかったが、小式部内侍は「丹後は遠いので、母からの手紙もまだ見ていない」と即座に歌で返し、母の助けなしに自分で歌を詠んでいることを示した。定頼中納言は思いがけない見事な返しにおどろき、返事の歌も詠めずに逃げ出した。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
① 母からの手紙（文）をまだ見ていない（受け取っていない）という内容が示されている	3点	「母と連絡をとっていない」等も可。「天の橋立に行ったことがない」だけは1点
② 現代語として自然で、10〜20字の字数を守っている	1点	古語の残存（「ふみもみず」など）・字数逸脱は減点